『永原慶二著作選集』全一〇巻完結に寄せて

「永原史学」の全容を把握する

歴史像構成の課題を生涯をかけて追求した研究の軌跡

池 享

あらためて歴史学とは何かを考えるよすがとして

昨年七月に開始された『永原慶二著作選集』（吉川弘文館）の刊行が、この四月に完結した。全十巻が揃ったところで思うことを、編集委員の一人として述べてみたい。

もとより永原氏の著作は膨大・多岐であり、『著作選集』と名付けられているように、そのすべてが網羅されているわけではない。しかし、氏は生前より著作集のプランを構想されており、今回の『著作選集』も基本的にそれに従った構成となっている。その意味では、「永原史学」の全体像を明瞭に理解できる内容になっているといえよう。なお、第十巻の巻末には、追悼文集である『永原慶二の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇六年）所載の「著作目録」の増補版が収められており、氏の著作の全容を把握することもできる。

各巻には、テーマに沿った研究者による「解説」が付されている。第一巻から順に紹介すれば、村井章介・木村茂光・筆者・蔵持重裕・鈴木敦子・池上裕子・入間田宣夫・脇田晴子・保立道久・青木美智男の各氏である。四〇〇〇字前後という少ない分量の中で、いずれも心のこもった、また簡にして要を得たコメントとなっている。これを通読すれば、「永原史学」の研究史・史学史上の位置が手に取るように理解でき、それだけでも『著作選集』は読む価値があるといえる。

各氏の研究上の立場や永原氏との関わりは多様であり、「解説」のトーン・ニュアンスも異なっているが、ほぼ異口同音に述べられているのは、内容の明快さであり論旨の一貫性である。それはもちろん永原氏自身の明晰さによっているが、同時に、社会構成史の方法に基づく、歴史の構造的・発展的把握から生まれていることも、共通の意見となっている。社会構成史を方法的基礎とする「戦後歴史学」には、社会や政治のあり方を生産関係に帰着させる「基底還元」論的傾向など様々な問題があり、多くの批判が寄せられていることは確かである。村井章介氏が指摘しているように、永原氏の初期の著作にもそうした傾向があることは否めない。しかし氏は、社会構成史の方法を堅持しつつ、最新の研究を自らの体系に取り込むことにより、その歴史像を豊かにしてきた。それは、常に現実との緊張関係を意識しつつ、歴史をトータルに捉えることこそが歴史学の使命であるという姿勢を貫いてきたからだった。この姿勢は、最後の著作『苧麻・絹・木綿の社会史』（本著作選集第八巻所収）に至るまで変わることはなかった。そこに、「永原史学」の生命力があるといえよう。

「戦後歴史学」が批判にさらされているとはいえ、それに代わる歴史像構成の方法が提示されているわけではない。入間田宣夫氏が指摘しているように、一世を風靡した網野善彦氏の「社会史」にしても、社会構成史に対する「異議申し立て」ではあったが、それ以上のものではなかった。それどころか、「ポストモダン」的思潮が広がると歴史は「物語」とされるに至り、「新しい歴史教科書をつくる会」の紡ぎ出す国家主義的歴史像も、「国民意識」育成のために日本「国家」・「国民」の来歴を語る「物語」として、正当化される結果を生んでいる。その一方で、歴史研究においては個別分散化が進み、歴史をトータルに捉えようとする志向性が弱まっている。まさに、歴史学の存在意義が問われている状況といわねばならないだろう。

そうした中で、新たな歴史像の構成を目指す試みも様々に進められている。例えば、東と西の歴史学会を代表する歴史学研究会と日本史研究会は、直近の大会でそれぞれ「新自由主義の時代と現代歴史学の課題」・「全体史、再び」をテーマに掲げている。現実を見据える中から歴史学の課題を設定するとともに、それを踏まえて歴史の全体像を再把握しようという試みの表明ともいえよう。後者の研究委員会の趣旨説明を読むと、単一的な理論や法則（グランドセオリー）の有効性には懐疑的であり、とりあえず個別の事象を検討しつつ、他の事象との時間的・空間的連関性を探る中から、時代や社会を特徴づける構造を見出そうとしたいとしている。このように慎重な姿勢を示してはいるが、「全体史」の重要性を強く意識していることは確かである。

このような研究状況にある今、歴史像構成の課題を生涯をかけて追求してきた永原氏の研究の軌跡を、『著作選集』によって辿ることの意味は大きい。とりわけ「網野以後」の歴史学に慣れ親しんでいる若手研究者の方々には、これを機会にぜひとも『著作選集』を手にとって、あらためて歴史学とは何かを考えるよすがとしてほしい。

（一橋大学教授）